

## 鶴岡まちなかキネマ

所在地／山形県鶴岡市

建築主／まちづくり鶴岡

敷地面積＝10,411.27 m<sup>2</sup>

工事種別／増築、用途変更、大規模な模様替え

用途／映画館、レストラン

主要構造／木造平屋

最高高さ／6.73m (B 西棟) 6.85m (C 棟)

建築面積／1,561.10 m<sup>2</sup> (第一期)

延べ面積／1,558.12 m<sup>2</sup> (第一期)

竣工／平成 22 年 4 月



エントランスホールのイメージ

## 鶴岡まちなかキネマー絹織物工場を文化拠点に再生するー

### 1. 設計の基本方針

#### ー絹織物工場の雰囲気を生かしたやさしい映画館をつくるー

近年映画館は複数の映画館を組み合わせたシネマコンプレックス (以下シネコンと呼ぶ) 方式でショッピングセンターに併設してつくられるのが常識となっている。全国どこでも同じようなショッピングセンターがあるのと同様にシネコンの雰囲気も規格化が進んでいる。鶴岡まちなかキネマにおいてはチェーン店のシネコンにはない個性的な魅力作りを行うために次のようなテーマを設定した。

#### ①地域に親まれてきた工場建築を生かした映画館づくり

昭和 7 年に大泉機業場を買収し、従業員 72 名、織機 64 台で松文産業鶴岡工場が発足してから 4 分の 3 世紀が経過している。古びた工場群からなる風景は、芭蕉も歩いた長山小路の落ち着いた雰囲気に溶け込み地域の歴史を私たちに語りかけていた。

松文工場は戦前の近代産業遺産としても貴重なものである。工場は老朽化していたものの、補強を加えることで十分生まれ変わることが出来ると判断した。防火避難性能の確保や構造補強、それに伴うコストなどの克服すべき条件はあるものの、私たちは歴史を経たこれらの建築、そして工場らしさを継承する計画をつくるのが、人々をひきつける魅力のひとつになり、同時に地域風景の継承につながることを確信している。

#### ②トラスの素晴らしい小屋組みを新しい魅力要素とする

操業中の木造工場の天井裏に登ってみるとそこには、キングポストとクイーンポスト 2 種類の頑強な小屋組みがあらわれた。しかも 6 間 (約 10.8m) という長大な陸梁には今ではほとんど入手困難と思われる一本ものの杉材が用いられている。これまでは天井があるため見えなかった素晴らしいトラスの小屋組みを見えるようにすることが建物の魅力要素となっている。



地元になじんだ長山小路



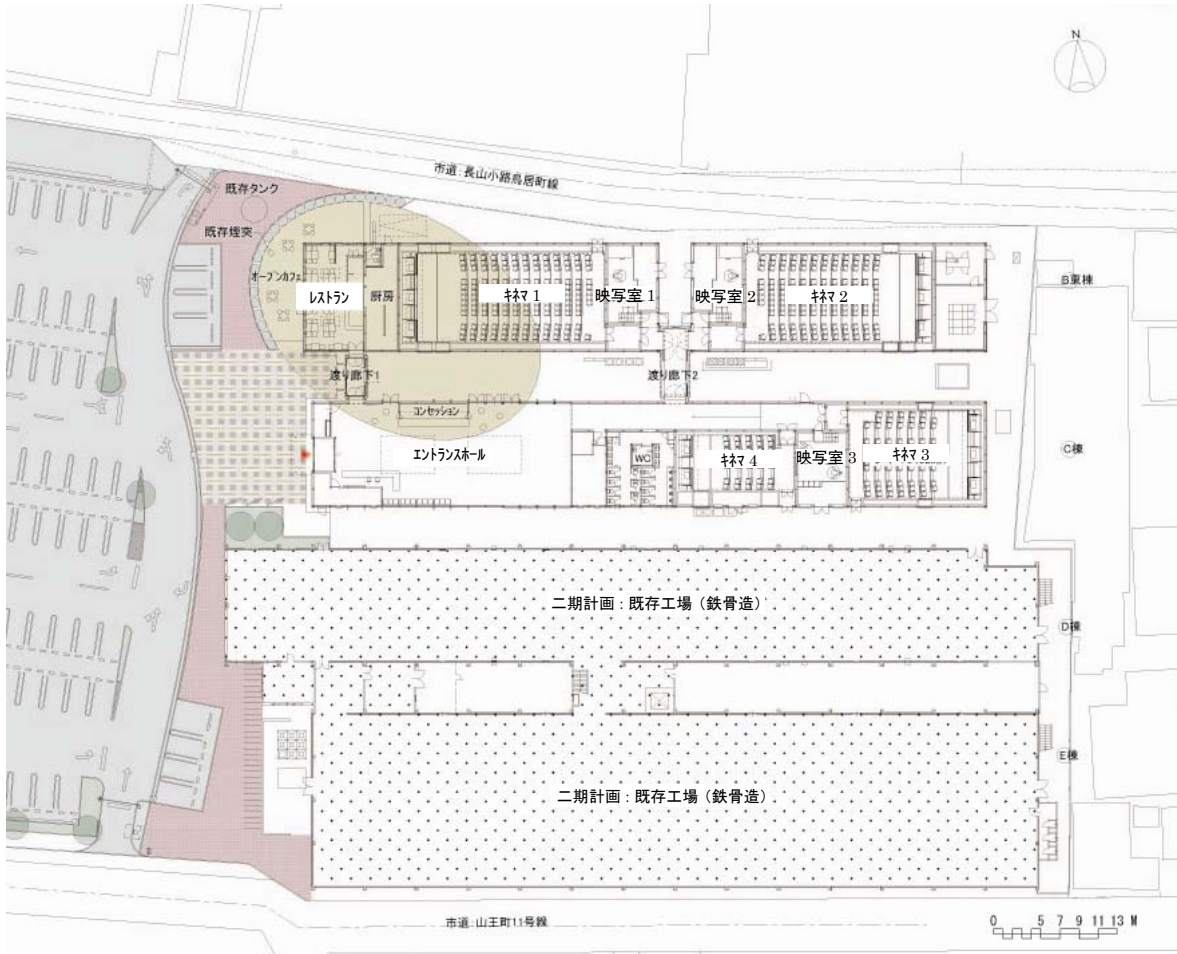
操業していたときは天井が張られていた



工事に着手し天井をはがした状態

### ③絹織物の工場であったことを活かしたデザインとする

かつて絹織物は鶴岡の基幹産業であった。また、日本の絹織物産業を支えた力織機を発明したのが地元の発明王齋藤外市であったこともあり、人々の意識のなかには絹織物をつくっていた歴史に対する誇らしさが綿々と継承されている。絹織物の工場であったという歴史をいかし、**絹にまつわるもの—織機や織物、繭—をモチーフとしたデザイン**を試みている。



配置図

## 2. 計画の考え方

### ①安全性の確保

木造建築を不特定多数のように供する用途とするため、スプリンクラーなどの設置は勿論のこと、基準法の規定以上の対応として、外壁、軒裏を準防火構造とすることにした。これにより、建築基準法上は「大規模な改修」となり、一般的には構造規定が遡及するが、昭和初期の木造建築を現行法規で評価することには技術的に大きな困難があるため、渡り廊下などの増築面積を最小限に抑え、また実質的な構造安全性を検証することで現行基準法の適用除外として扱った。当然、鉄骨などにより構造的に必要な補強を行っている。

### ②分棟化による防火、避難の独立性の確保

200 m<sup>2</sup>を超える映画館は耐火建築とすることが基準法で求められている。そのため全体を3棟に分離し、それぞれの棟で防火避難上の安全性を十分に確保することで、基準法への適合を行っている。

### ③地下方向への空間の拡大

近年シネコンなどでスクリーンが大型化していることもあり、まちなかキネマでも高さ2.6mから3m程度の画面サイズを確保したいと考えたが、梁下の高さがどうしても確保できない。そこで、映画館部分に関しては床を掘り込むこととした。構造的、施工的には難しいものとなったが、地下方向に空間、気積を拡大したことで、日常空間とは少し空間体験の質を変えることができた。木造架構の利用可能性を拡大したものと考えている。

### 3. デザインのポイントー木造の骨組み×絹織物

#### ①キネマ

木造トラスの小屋組みを現し、木の持つ親しみやすさを感じられる映画館をつかった。客席数も小規模でゆったりと落ち着いた映画鑑賞が出来る。

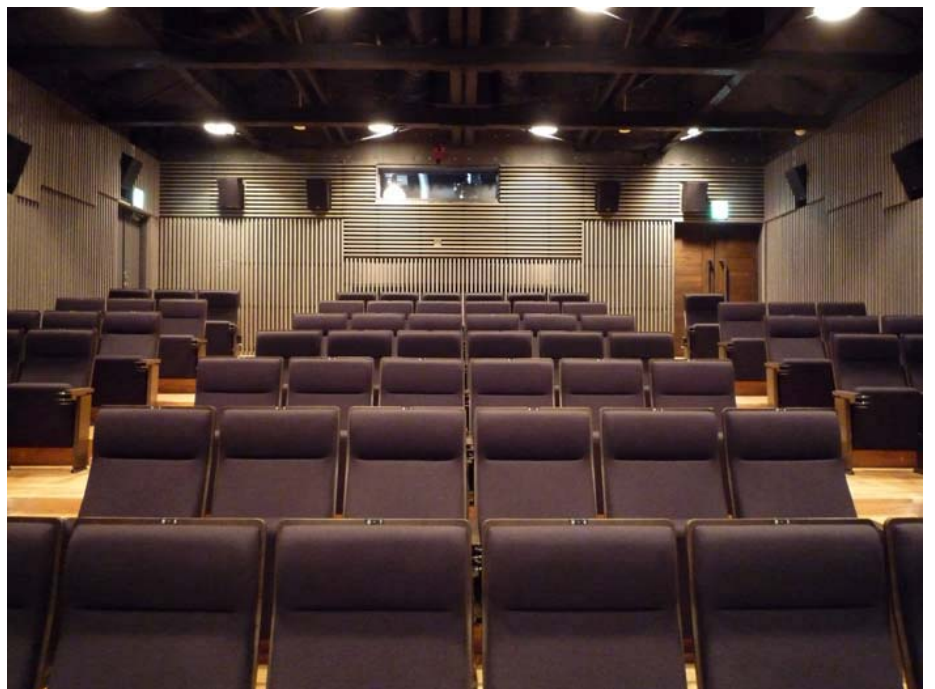
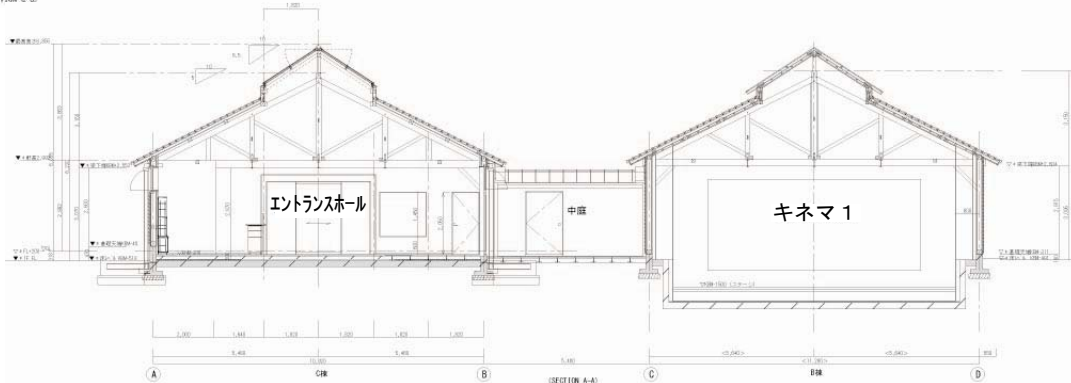
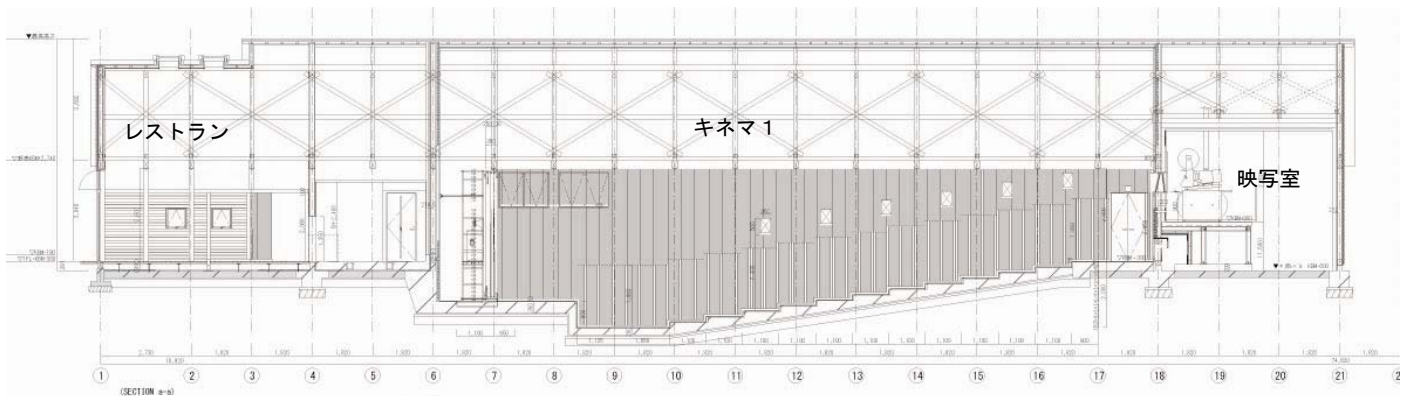
壁の木製格子は絹の機織機をイメージしたものである。またキネマ3、4は縦と横の格子を組み合わせ、織物の経糸、横糸を表現している。

椅子にも絹のイメージが継承される。一般的なシネコンで用いられるようなプラスチック製の背板ではなく、木の生地を生かし、絹の布地のようにしなやかな曲線を描くようにした。

またスクリーンの手前には小ステージを設け監督や出演者の舞台挨拶や映画談議など鑑賞者がより多様に映画を楽しむためのイベントを行えるようにしている。



キネマ3



壁の木格子は経糸と横糸を表している

(キネマ3)

## ② エントランスホール

かつての工場も、腰屋根と呼ばれる高窓に窓が設置されていた痕跡が残っていたので、おそらく明るい雰囲気をもってたと推測される。再生されたエントランスホールにおいても、**上部トップライト**からやわらかく光を導きいれダイナミックな小屋組みを照らし出すようにしている。床は固い栗のフローリング、壁は**旧工場時代と同様に杉堅目貼**りとし、木に包まれた親しみやすい雰囲気とした。

この広々と明るいアトリウムのような空間の中にミニコンサートや展示などの出来る多目的のコーナーや旧松文産業鶴岡工場のメモリアルコーナーも設置し、「シネコン」とは違う、市民の活動スペースをかねた一味違う映画館ホワイエをつくっている。



トップライトからの光にあふれるエントランスホール

## ③ 外観、外回り

トタン板で覆われていた外観は、防火性能を確保した上で**杉の下見板張り**に復元し、昭和前期以前の風景を再現した。**オイルタンク**や**煙突**なども継承すべき工場風景のひとつと考え、壊さずにおいておくこととした。

エントランスに向かう床面のパターンは、かつて生産していた**羽二重の織物パターン**に対応している。エントランスに向かって二本一組のベージュ色の経糸がのびる。それに交差するように薄いグレーの横糸が絡んでいる。

また、ヒラボク食堂のデッキの平面形や、エントランスフードコーナー前の床に用いられている曲線をつなげていくと、大きな**繭のかたち**になっていることに気づく。同様に駐車場の料金清算機などの黄色が通常見慣れているものと違い、**黄繭の色**となっていることに気づく方もいることと思う。



羽二重のパターンをイメージしたエントランス広場



外部テラスのあるヒラボク食堂



北側(左手)には旧工場の歴史を継承するタンクと煙突がみえる